

学生が“相談する”ということ

杉山 雅 宏

I. はじめに

学生たちは、様々な理由で学生相談室（以下、「相談室」とする）を訪れる。根底には、充実した学生生活を送りたいという気持ちがあるのだろう。学生たちの相談室利用の仕方については、はっきりとした言葉になりにくい展開もある。しかし、それは大学という学生の生活の場そのものの中にある相談室ならではの展開であると思う。

相談室で語られる問題や悩みは、相談室に来ない多くの学生たちにも、程度の差こそあれ、共有されている事情であろう。それらは、彼らが育ってきた環境や現代の社会状況の問題を映し出しているといえる。

最近、「悩めない学生」（高石，2009）や「巣立てない学生」（鎌田，2007）が増えてきた等、大学生の影の部分ばかり強調されることが多くなってきた。いつの時代も大学生は健康的な明るさの裏に、一歩踏み込むとそれぞれ自分で取り組まなくてはならない課題を抱えているものである。社会状況の変化の中で、その課題が複雑化し、学生たちの心身の揺れの振幅が大きくなっていると言える。学生時代に悩むことや症状を抱え取り組むことは、学生たちがまさに青年期の発達課題に取り組むことでもあり、学生相談は日々、そのための場を提供しているとも言える。

岡本（2007）は、相談室を、臨床心理士の行う専門的なカウンセリング環境の維持、援助とは別に、学内に一応のところ健康・適応的といえる学生を含めた学生たちの居場所として位置づけている。そして学生の教育・支援には、専門的カウンセリングと並行して、社会的・発達の未熟さの目立つ学生に対して、彼らをひとりの人間として、学業、生活、心を含め

てトータルに支えることの必要性を強調している。山下（2010）も、ピア・サポートを核とした学習相談中心の相談実践を振り返り、上記と同様の指摘をしている。これは最近の学生相談が、学生と大学の将来を考え、“マイナスポイントの除去”よりも、“プラスのポイントづくり”の立場から学生相談の重要性を示したからであろう（齊藤，2003）。

相談室とその周辺に関するスタッフ・教職員はきわめて多様であり、各大学ごと様々な試みが展開されている。しかし、相談室は、不適応学生の続出を訴えるだけではなく、異なる価値観のよりどころとしての相談室、個別・随時の教養教育としての相談室という、すべての学生に開かれた教育的機能を有する成長支援の場としての展開が期待されることは確かである。

本稿では、私が今まで経験してきた相談室での学生とのやり取りの一端を垣間見ることにする。そして、学生を対象とした相談室が機能するための1つの対応の仕方、援助者としての心構えを示そうと思う。学生支援が相談室の中で実際にどのように行われているのかを知ることにより、カウンセラー以外の教職員が学生を支援する際の“道しるべ”になればよいと考えたためである。

Ⅱ. 学生が相談室をどのように捉えているか

学生は相談室をどのように捉えているのだろうか。実際に相談室を利用する学生とそうでない学生との間に捉え方の相違はあるのだろうか。学生はどのようなイメージを抱き、どのような期待を持って来室するのであるうか。

私が以前勤務していた相談室利用の手引には、「相談室は、学生生活を送る上で遭遇する様々な事柄について、カウンセラーと一緒に話し合い相談できる場所です。人生の主人公であるあなた自身がカウンセラーとの対

話を通じて、自分自身を深く見つめ、問題や悩みを、あなた自身の力で解決したり、自分らしい生き方を見出したりしていくために、カウンセラーはあなたたちに寄り添い伴走します」と記してある。それでも、「自分は中学・高校時代から友だちがいない」「大学生になっても友だちができないため、友だちの作り方を知りたい」という主訴で来室する学生もかなりいる。「相談室では友だちを紹介してくれますか？」と淡い期待をこめて私に質問してくるのである。このささやかな期待に寄り添うことも、“伴走”の想定内と理解して支援をする。

友人に最近なんとなくやる気がでない、大学に行きたくないと相談したら、相談室に行くように勧められたため来室したという学生がいる。こうした学生は実際、カウンセラーを前にすると、「自分が何をしにきたのかよくわからないため、話したいことが言葉にならない」と、歯切れが悪い。悩みはあるのだろうが、初めの段階で言語化できないのである。こうした学生の存在は珍しくない。

悩みや抱えている問題について相談することが直接の目的でない学生も来室することがある。「ちょっと聞きたいことがあるのですが……」「予約したわけではないのですがちょっと来ただけです」など、予約なしで相談室に飛び込んでくる。このちょっとした来室が案外多いのである。相談内容としては、キャッチセールスや訪問販売等の勧誘をどのようにして断るか、講義中の後ろの座席に座る学生たちの私語が目立つことに対する抗議、彼氏・彼女とうまくいかない、自己の将来像への漠然とした不安、他大学・他学部への転編入についての質問等である。同じような話の内容であったとしても、学生の相談室への期待は人それぞれである。極端な話、相談室の人なら誰でもいい、大人であれば誰でもいいという気持ちで来室する学生も多くいるような印象を受ける。

これといった具体的な相談はなく、ただ「私のような学生が大学にいる

ということを知ってほしだけです」といって来室した学生もいる。こうした学生は、特段、悩みを打ち明けるわけではない。しばらくの間、相談室の中でカウンセラーとともに時を過ごすだけである。世間話に花が咲き、時が流れていくことさえある。このように、学生たちは思い思いの利用の仕方をするのである。総じて、相談室は学生にとって安心して利用できる場所のようである。

Ⅲ. 学生の相談室への期待

多くの相談室では、一般的に初めて来室するときには、受付カードに所属・名前・相談内容等必要事項を記し、面接を始める。その後、継続面接の必要や希望があれば、その学生の都合を聞き、次回面接の予約をするというシステムになっている。しかし、ほとんどの学生は、予約なしで、「ちょっといいですか」と言いながら入ってくるので、こちらも挨拶しながら出迎える。ちなみに、カウンセラーは、礼儀正しく丁寧に相対するよう注意を払う。全く別個に生まれた存在が、あるとき、あるところで出会い、時空をともにするとうことは、1つの奇跡である。出会いに対する畏敬なしに援助活動は成立しないと考えるためである。それなのに学生は入ってくると同時に、一方的に言いたいことを言ったり、泣きじゃくったりする学生も多くいる。逆に、唐突に相談室に入ってきて、その後、一言も言葉を発しない学生もいる。それでも、何度も相談室に通い続けるのである。こうした学生と何回か話していてわかったことであるが、初めてのときは、とにかく相談室の門を叩くことしか考えていなかったとのことである。また、受付カードに所属・名前までは書けたとしても、相談内容を記入できないという学生も多くいた。私は相談室に来た、受付カードに書けただけでも、言語化されない悩みへの気づき、自己成長への気づきと捉えるようにしている。

上記の友人に紹介されたという学生も、実は相談内容を書くことができなかった。「何を相談したらいいのか、自分でもよくわからないのですが、それでもいいですか？」という言葉から初回面接がスタートしたのである。話をよく聴いてみると、その学生自身は、大学に来たくないことで特段困ってはいなかった。むしろ、ここに来ることを勧めてくれた友人とのつきあいに少し息苦しさを感じているとのことだった。そして、心配してくれる友人に対して、感謝はしているものの、自分の問題については干渉して欲しくはないこと、そうした気持ちを抱えていることを、傷つけない方法で友人に伝えるにはどうしたらいいのかということに苦心しているようであった。

このように、何を目的に相談室を訪れたのかについて、カウンセラーと学生双方が確認することが、最初のやりとりになる。場合によっては、自分自身の気持ちがわかったところで、すっきりした気持ちになり、「相談はやはり結構です」と帰ってしまう学生もいる。このようなやりとりだけをするために相談室を来室する学生もいる。「そんな簡単なことで、自分は今までモヤモヤしていたんだ」ということに気づくのである。

学生の話をしっかり傾聴することは大切な営みである。苦難を抱える人を助けてあげるためには、相手が「何を」「どのように」困っているのかということのを正しく理解することが必要である。何とかしてあげたいと焦るあまり、「正しく理解する」という営みがおろそかになると、不十分な理解や乱暴な手助けをしてしまうことになりかねない。早わかりしないで丁寧じっくり相手の話を聴くことが肝要である。相手の言う通りに聴く(河合, 1998)のである。カウンセラーは常にそのようなことを心がけている。私は信頼関係を構築するために、逆に、聴く姿勢を学生に見られているという気持ちを忘れないようにしている。

Ⅳ. 学生の生活場面に寄り添う

「おはようございます」「こんにちは。まだまだ暑いですね」「寒くなりましたね。風邪ひきそうですよ。でもがんばって講義行ってきます」など、相談室のドアを開けて、私に一声をかけていく学生が必ずいる。相談室に常駐していると、このような学生との不思議な出会いもある。毎年、夏休み明けにこうした学生が増えてくる。その日の気分次第で、毎日来るわけではない。相談室という場所とカウンセラーという人間に慣れてきた証であろう。私もこうした学生には、「おはようございます」「講義、がんばってきてくださいね」「暑いけれど、気分爽快ですね」「ありがとう。お互い風邪ひかないようにしましょう」と自然に言葉を返すようにしている。

こんな学生もいた。相談室のドアを開け、私の姿を見ると、「あっ、……」と言葉を発することはない。何か用事があるって尋ねてきたのかもしれないが、あえて深追いはしない。「よろしかったらどうぞ」と入室を促すと、ソファに腰掛け、世間話をして帰っていく。「今日は一日誰とも話をしなかったから、話し相手になってくれますか？」という学生も時には来室する。もちろん大歓迎である。

不登校傾向の強い学生や、休学をされていて、長期休暇明けから復学を予定している学生が、“リハビリ登校”のために相談室を活用することもある。面接が終わると学生は「ひとりではまだ学生食堂に行く勇気がありません。一緒につきあってくれますか」と誘ってくる。こうした学生とは、面接するだけでなく、一緒に学生食堂で食事を共にすることもある。学生食堂はどこのテーブルも小グループごとわいわいがやがやしていて、傍から見ても本当に楽しそうである。よく観察すると、ひとりで食事している学生を探すのが難しい。特定の友人関係を親密に持つことが苦手である不登校傾向の強い学生にとって、ひとりで食事をする気になれない気持ちがよくわかる。こうした学生の生活場面に寄り添うことも、時にはカウンセ

ラーに求められるのである。各大学が抱える事情も異なるが、上記のような関わりは、相談室からの教育的支援として、休学者の復学支援としての“リハビリ登校支援”（山本，2004）の具体的は方策を模索するうえで参考にさせていただきたい。

V. 学生の傍らにとどまり続ける

学生の話につきあっていると、「あなたはどうしたいと思っているのですか」と質問したくなることがある。問題が長期化してしまい、問題が起ったときと現在とでは気持ちの違いが明らかになっていたり、うまく言葉で表現することができなかつたりということであれば、わからなくもない。もちろん、学生に上手に気持ちを表現して欲しいというわけでもない。カウンセラーの立場では、どのようにすれば、あなたにとって納得いく方向に進むのかを一緒に考えていきましょうという姿勢を一貫して示しているつもりである。面接を展開していくうちに、話題が次々に展開していつてしまうことも確かにある。学生は問題解決を焦るから、ドロドロした気持ち、あいまいな気持ち、揺れ動く気持ちを吐き出してくる。そんなときこそ、学生の傍らにとどまり続けることを心がけるのである。

ある学生は、医師のところを訪れるような気持ちで来室する。問題解決の具体的方策や正解の提供を性急に求める学生である。具体的な指示が欲しいのである。私は、学生が期待したような形では動かなかった。あれこれと出来事を並び立ててきた学生に具体的な指示をだすことはあえてしなかった。むしろ、そうしたカウンセラーの行為が、学生自身にどのような気持ちを起こさせたのかを尋ねる場面もあった。

こうした展開に、学生自身は不満を抱いたようである。この学生にとって、相談することは、問題が即解決するというイメージを抱いていたのかもしれない。しかし、私からすれば、どのようになることがその学生にと

ってうまくいったと思えるのがよくわからない。そこで私は、どのようにしたいのか、どんなことならできそうなのか？と尋ねてみると、「それがわかれば苦労しません。それを知りたくてここに来たのです。あなたはカウンセラーなのに、そんなこともわからないのですか」と急に怒りはじめるのである。私は学生に対して、「あなたと私はまったく別人格の人間です。私からすれば、このくらいでいいのかな？と思えるようなことでも、残念ながらあなたはそうは思えないこともある。だから、じっくり、あなたにとって納得のいく状態と一緒に考えることがよいことだと思うのですが……。あなたの人生の主人公はあなた自身なのです。あなたの人生を私が決めてしまってよいのですか」と伝えてみた。学生は、「話を聴いてもらえるのは確かにうれしい。しかし、聴いてもらうだけではまったく役に立たない。具体的な助言をしてくれると思っていた。カウンセラーはそれなりの答えを与えてくれるのではないのですか？」と言って、納得しない様子で相談室を立ち去った。ところが、不思議なことに、その後も幾度となく相談室を訪れるのである。学生の思うようには、役に立つことはできなかったようであるが、こうしたやりとりを繰り返すうちに、その学生は大学を卒業していったのである。

最近、強迫的傾向の強い学生と面接する機会が増えてきた。「もっと効率的に治す方法はありませんか」と学生は迫ってくる。こうした学生にとって、私とののりくらりとしたやり取りは、時間の無駄と考えるのだろう。しかし、こうした時間の使い方を自分自身に許すことが、強迫的傾向からの脱却につながるのではないだろうか。

相談室に来るすべての学生が、カウンセラーからの指示を期待しているわけではないだろう。私が常に心がけていることは、カウンセラーがこの場で提供できることを正直に伝え、この先どのようにしていくのかを一緒に話し合うようにしている。カウンセラーは、人生という深く、暗い森の

中をさまよい歩く道の、いわば同行者である（諸富，2010）ことを伝えているのである。

時には、学生の状態から察して、医療機関への受診を勧めたりする場合もある。自分が相談を受けたからといって、何もかも自分で背負いこまなければならないわけではない。学生を見捨てたわけでもない。むしろ、「自分はたくさんある相談窓口の1つなんだ」と思い、自分の力が及ばないこと、自分にわからないことは正直に伝え、他の窓口を活用し、他機関から助力を求めるようにしている。このようなスタンスで見守り続けることも、学生の傍らにとどまることになると思います。

VI. 急がば回れ

かつて勤務していた相談室には、面接室とは別に待合室があった。そこはソファセットが置かれ、雑談のできる空間であり、書棚とカウンセラーの事務机も置かれていた。待合の学生がいなときには、家庭的雰囲気をも出し出す“ふれあいの場”としての機能を果たしている。書棚には心理学関連図書や雑誌、簡単にできる心理テストも置いてあるため、学生には人気の癒し空間である。「心理テストやってみました。見てください」「このテストで、性格診断して下さい」「講義が休講になりました。ちょっと話してもいいですか」「先生、オセロいっしょにやりましょう」など、自然体で声をかけてくる。私もそれなりに対応するが、たまたま忙しそうに事務仕事をしていると、「忙しそうなら、また来ますね」と立ち去る学生もいる。

明らかに何か悩みごとがあるような雰囲気を醸し出す学生もいる。最初はすぐに立ち去り、次第に滞在時間が長くなる学生もいる。私もそういう学生を無理に引止めようとはしない。「またいつでも来てくださいね」と声をかけて送り出す。一瞬でも、丁寧な対応を心がけるのである。こうし

たやり取りを何度となく繰り返す。はじめは、カウンセラーが話しかけてくるのを待っていたような学生であっても、「少し話を聴いてくれますか」と自ら働きかけてくる学生もいる。“ふれあいの場”での学生との関わりは、相談室への呼び水となるのである。

相談したいことがあると予約に来るときに、よく雑談をしていく女子学生がいた。この女子学生は、予約日には連絡もなくキャンセルする。そして、数日後予約を取りに来て、また雑談をしていく。再び予約日にはキャンセル。こうした状況が何度も続いた。私は、女子学生が予約を取りにくるたびに、「他の予約を入れず待っていたのに残念だったなあ」「連絡なしにキャンセルすると私も気になるので、必ず連絡してくださいね」「相談がないならば、雑談だけのために来てもいいのですよ」等を毎回、女子学生に伝え続けた。するとある日、キャンセルすることなく予約日に女子学生が相談室を訪れた。女子学生は、「自分のことをそのように待っていてくれる人は今までいなかった」と語り、悩みを打ち明け始めた。人を信用することができずに長いこと苦しんでいたようである。学生に信頼されたいのなら、裏切られても気長に待ち続けることが必要であることを、女子学生から教えられた。相談室に来る、予約をとるという行為は、何か課題を抱えているサインであるから、そうした学生の存在を尊重する姿勢が功を奏した。

面接室で面接がはじまると、5分もしないうちに落ち着きをなくし、話に集中できなくなる女子学生もいた。面接室内は落ち着くような設定にしてあるため、意外である。しかし、その女子学生にとっては、面接室が閉鎖的過ぎて落ち着かない場所なのであろう。そこで、「次回の面接は、ソファのある隣の部屋、“ふれあいの場”でやりましょうか」と提案してみた。すると、女子学生は、面接室での様子とはがらりと態度が変わり、活き活きと、自分の趣味の話、ライブを楽しみにしていること等、語り始め

た。一般的に面接室は、個人的な話をしやすい場所として捉えているのであるが、女子学生は、「面接室では深刻な話をしなくてはいけないと思うと、逆に話せなくなってしまう」と認識していたようだ。趣味の話やライブについての話は、ただのおしゃべりと思われがちである。しかし、それは間違っている。急ぎ課題解決的な話をする事だけが、学生相談ではない。粘り強く関われば、学生の人となりは伝わってくるものである。急がば回れ。何回かおしゃべりで来室した女子学生は、その後、自身の悩みを打ち明けることができたのである。擬似恋愛の場として、ライブでの癒しを求める背後には、過去の家族関係での深い傷を治癒しようとする女子学生のもがきが見え隠れしていた。

Ⅶ. “程よい距離”でのつきあい

今までの話から、相談室の機能は、悩み方や相談の仕方まで手取り足取り教えていくようなものであり、大学の中でそこまでする必要があるので、学生を甘やかすことになるのではと思われる方もいるであろう。逆に、雑談目当てに相談室に来るような学生に対しては、積極的に外に目を向けさせるべきであるという意見もあって当然である。

私は、自分自身で解決すべき問題に関して安易にこちらの答えを望む学生に対して、指示を与えるような、学生にとって都合のいい大人になるつもりはない。このような学生に対する関わり方は、“丁寧な関係作り”や“程よい距離”が求められるだろうが、手取り足取り教えるということになってはいけないと思う。むしろその逆である。私たちカウンセラーは、学生が自分自身のことについては、自分の責任において主体的に向き合っていくことを援助するという姿勢で常に学生に対峙している。カウンセラーは学生自身が何に対して悩んでいるのか、何について困っているのか、苦しんでいるのかを確認し、そして、相談室で何ができるのかを学生と話

し合うのである。学生が悩むことを肩代わりするようなことはしていない。多くの学生は、潜在的に自分のことを自分のこととして考える力や問題解決に向けて、その方策を見つけ出す力、いわゆる“相談する能力”（片野，2001）を持っている。そして、そのような力に気づき、その力を発揮するに至るまでの悩みを、自分自身の中に抱え続ける力を備えているのである。だから、悩みを抱えるということが、精神的に弱いとかおかしいとかではない。むしろ、健康で成長する力が備わっているからこそ、「何かおかしい。このままではいけないかもしれない」「この状態が続くと少々危険だ」というセンサーが敏感に働くのである。それが、学生自身の問題意識に後につながっていくのである。私自身が学生と最初に出会い、感じるその学生についての問題意識と、学生が最初に私のところに来たときの問題意識に若干のずれがあったとしても、それは大きな問題ではない。私は、学生自身の問題意識を大切にしているのである。

困ったときにだけ来室するある学生に尋ねたことがある。「あなたはいつも同じようなトラブルに巻き込まれるみたいですね。今度は誰とのトラブルですか？」こうした問いかけをすると、学生は、「自分自身に問題があるのでしょうか？時々、自分でもおかしいと思います。自分に問題があるとしたら、自分が変わるしかないのでしょうか？」と、自分自身に初めて目を向けたと解釈できる言葉が返ってくる。こうした心の内側の問題に学生自身が気づくまで根気強くつきあうことが大切なのである。もしも、学生が最初に来室したときに、私が、「あなたにも多少問題があるかもしれませんね」「前回も同じようなことで失敗しましたね」と言えば、「この人にはわかってもらえない」という気持ちを募らせ、学生との信頼関係は醸成されないだろう。学生は自分自身の悪いところだけに目を向け、自信をなくしてしまう。何度自己弁護を繰り返しても、カウンセラーは自分のことをわかってくれないという展開になる。相談室で学生に対峙する場合、

この点は注意を要する。私はあくまでも、学生のトラブルの直接的な相手ではないため、当事者としての気持ちを伝えることができないのである。カウンセラーは、学生の話聴いている第三者として、人命にかかわるような緊急事態の場合を除いて、学生自身の自立の芽を摘んでしまってはならないのである。

私は、学生とはつかず離れずの関係性を保つように心がけている。来室する学生はとても敏感である。だから、「教えてあげる」というような上から目線で発言したことについては、耳を傾けようとはしない。学生の存在に対する尊敬・尊重の気持ち（岩本，2004）を忘れず、お互いが対等な人間として、きちんと話ができるようになるまで、つかず離れずの“程よい距離”を保つことが大切である。しかし、これが難しい。どちらかが近づきすぎたり離れすぎたりすると、いろいろな出来事がおこる。相談室に持ち込まれる話は、学生の生活場面そのものの中での関係であるから、カウンセラーと学生との間の関係にとどまらず、学内外の多くの人々が関係してくることも想定されるからである。こうした過程で起こったことを活かしつつ、いかにして学生の気づきを促していくかは、カウンセラーの力量が問われるところである。

VIII. 考察—自分とつきあう時間とゆとりを求めて—

「最近の学生が何を考えているのか理解できない」ということを大学内でよく耳にするようになった。原因のひとつとして、大学の大衆化に結びつけて語られることがある。しかし、そのように言うことは、真の学生理解につながることはなく、学生理解の放棄にもつながる可能性があるのではないだろうか。「最近の若者は……」という言葉は、メソポタミアの碑文にも見られるし、プラトンも、「最近の若者は、何だ……」と自分の弟子に対して言ったように、いつの時代にあっても必然的なもので

ある。上の世代は、自分たちの文化を継承していくべき教育の対象とする下の世代を、そのように類型化して捉えることはよくあることである。しかし、このような類型化があるからこそ、教育というものが発想されるといっても過言ではない。ただし、それが愚痴や嘆きであってはならないと思う。また、いたずらに問題化し、対策を外から講ずるというわけにもいかないだろう。必要なことは、学生に向き合い、根気強く対話を繰り返すことであると私は考える。

相談室に来室する学生も、基本的にはこうした大人との対話を求めているのではないだろうか。私が経験した僅かな事例でも、学生たちは自分たちの思いを話して受け止めてもらい、時には助言してもらい、自分自身の感じ方・考え方の一つ一つを確認していくことを、強く求めているのである。このことは、学生相談だけに当てはまることではない。私の講義終了後に学生から回収するリアクションペーパーの記述の中にも、そうした学生たちの思いを読み取ることができる。

情報化時代の到来のあおりから、日常的な人間関係の中では、学生自身も会話から逃避してしまっていることも多い。それだから、現在の学生は葛藤を避け、悩みから逃走する傾向がある（船越・山崎，2007）とは必ずしも言い切れない。相談室にもちこまれる学生の話を経合すると、友人との関係の中で、あえて自分の本当に思うことをぶつけ合うことはないし、それができる関係ではないと感じているようである。友人を配慮の対象（芹沢，2008）として捉え、うまく距離をとっている。また、情報網の発達の影響か、学生は複数の集団に器用に属している。学生たちは、一つの集団にどっぷりつかり、そこに自分の存在のすべてをかけるということは少なくなってきた。むしろ、一つの集団にしか属せない学生、すなわち、人間関係を器用に渡り歩けない学生は、人間関係をこじれさせ、居場所を失ってしまいがちになる。それぞれの状況に応じた、自分というもの

があり、あまり深入りすることなく、みんなとうまくやっていく。現代の学生は、質の高い人間関係調整能力を身につけている。これは、状況に応じて仮面を被り、その裏に本当の自分を隠しながら渡り歩くという古典的な図式では、到底説明は不可能である。現代の学生に「本当の自分」などはないのかもしれない。仮面だけの姿かもしれない。これが、ある意味、現代に適応的な生き方なのかもしれない。

しかし、こうした生き方は、自分自身の人生の危機的な局面に遭遇した途端に破綻を来す。自分にとって、何が正しくて、何が適切でないのか、何が自分の意思なのか、自分は何を好むのか等々の問いかけに対して、まったく見通しが立たなくなるのである。

人間関係や教育的関係が、合目的的で機能的になってきた今日、学生が自分というものを遠慮なく表出し、確認できる場合は、学生相談の場しかないような印象を受けるのである。学生の心を育むためには、“ゆとり”が必要になる。“ゆとり”とは、人と人がともに存在するという教育の根本として、向き合い話し合う時間をもつという意味での“ゆとり”である。今後の高等教育には益々必要となるであろう。

一般に、人とつきあうというと他人との関係を考えるが、最も身近で長い間つきあう他人は、自分自身である。学生相談でも同様だが、カウンセリングが深まってくると、人とうまくつきあえないと訴える人は、まず自分とつきあいあぐねていることがわかってくる。人間関係を取り結び維持していくためには、自分とうまく折り合えることが必要である。人は自分と必ず好みや考えが異なる。人とつきあうことは、その間に折り合いをつけていく作業なのである。他人とつきあうということは、自分との好ましい関わりが基盤にありはじめて可能になる。だから、自分とつきあえるようになるためには、「自分とつきあう時間」を十分に確保することが必要なのである。相談室での学生との関わりは、まさにこのことを実践してい

るのである。

Ⅸ. 今後の課題

心の成長にはゆとり、時間、守り、抱え、覚悟と度胸、それに勇気などが必要である。学生が自立した人間に育つためには、自覚的に立ち止まって考えることが必要である。そして、自ら感じ、考え、苦悩し、自分を信じ、他者を信じ、見守りながら勇気を育て、思考錯誤と経験を重ねるといふ、抽象的かつ曖昧な経験を積むことから始まるような気がしてならない。このことは、学生だけではなく、相談室を担当する私たちにも当てはまることであろう。曖昧さは明快さに打ち負かされてしまうことが多いことを、心に留め置きながら、学生が“相談する”ということを考え続けたいと思う。

<引用文献>

- ・船越知行・山崎晃資 2007 大学教員からみた学生相談の課題 精神療法 33(5) 547-552
- ・岩本俊郎 2001 『教育学への道』 文化書房博文社 2004 39-40
- ・鎌田恭孝 2007 『変わりゆく思春期の心理と病理』 日本評論社 17-56
- ・片野智治 2001 『実践サイコエジュケーション』 図書文化 23-27
- ・河合隼雄 1998 『カウンセリング入門』 創元社 9-11
- ・諸富祥彦 2010 『はじめてのカウンセリング入門(上) カウンセリングとは何か』 誠信書房 2-9
- ・岡本貞雄 2007 見果てぬ夢? 「学生相談」の展望～「大学における学生相談体制の充実方策について」を読んで～ 大学と学生 518号 7-13
- ・齊藤憲司 2003 新たな学生相談・学生支援モデルの定立のためにー厚生補導・学生相談50年/改革と再興ー 東京工業大学保健管理センター年報 31 66-81
- ・芹沢俊介 2008 『若者たちはなぜ殺すのか』 小学館 179-182
- ・高石恭子 2009 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究 15 79-88

学生が“相談する”ということ

- ・山本大介 2004 苦難を抱える学生への支援～キャンパスに共に在る者として～ 大学と学生 479号 15-24
- ・山下啓司 2010 素人集団による学生支援～名工大の試み～ 大学と学生 558号 44-49

<謝 辞>

本稿は、平成23年10月22日に東北福祉大学で開催された、「日本学校心理士会宮城支部研修会（資格更新B研修）」における講演原稿の一部に大幅な加筆・修正を加えたものである。発表の機会を提供して下さった、東北福祉大学の西野美佐子教授（日本学校心理士会宮城支部会長）に感謝の意を表す。